

第四百六十七回 青葉会句会選句表

令和七年三月二十七日(木)

場所…世田谷区三茶しやれなあと

選者 川口孤舟

投句・選句

柿崎忠彦 川口孤舟

久米五郎太

熊谷くにお

後藤とみ子

小早健介

在間千恵 佐藤ただしげ

高橋康敏

田島正己

土谷堂哉

豊田ゆたか

西澤國護

福島正明

古川百合子

古田昇

星田啓子

山崎亜也

山田けい子

山内天牛

渡邊盛雄

選句のみ

伊賀山そらお、梅崎くすを

重枝孝岳

庄司龍平

高橋清子

橋口隆

早川允章

山本三恵

【互選句】

◎は孤舟選者の選

選者欄の○は選者の「天」

八点

◎薄紙に優しく包み雛納め

忠彦

(孤・た・龍・百・允・亜・天・三)

七点

◎どの墓も一刷毛の雪彼岸寺

くにお

(孤・五・千・清・堂・啓・三)

◎薄氷や八十路の坂は急がずに

五郎太

(そ・孤・千・隆・允・正・盛)

◎鳥帰る星座は空の羅針盤

健介

(忠・孤・○と・○正・昇・百・盛)

六点

制服をすこし着崩し卒業す

孤舟

(健・千・孝・昇・亜・け)

鳥帰る噴煙猛き桜島

堂哉

(そ・く・健・隆・允・け)

日向ぼこあの世この世の渡し舟

百合子

(くす・孝・龍・堂・亜・○三)

五点

色褪せた雛飾るたび母偲ぶ

忠彦

(○そ・孝・己・ゆ・國)

青き踏む名を持つ山と持たぬ山

孤舟

(くす・健・三・亜・盛)

京菓子の萌黄色より春兆す

千恵

(五・清・康・啓・天)

春の雪近況すこし偽りて

とみ子

(くす・○健・堂・啓・け)

水温むいでや小鮒の顔を見に

亜也

(五・た・隆・啓・三)

四点

木々芽ぐむ小さな命たくましき

忠彦

(と・孝・康・國)

甲羅干す亀まどろみの日の永さ

孤舟

(くす・千・康・け)

春の富士手庇に入れ行人坂

とみ子

(く・五・康・己)

◎啓蟄の大地踏みしめ嬰立てり

康敏

(孤・く・允・盛)

浅春の早も乙女の素脚かな

堂哉

(健・龍・國・隆)

逆立ちし蜜を吸い取る目白かな

正明

(五・千・堂・百)

◎糟糠の妻かも知れぬ残り鴨

昇

(○くす・孤・百・三)

◎古代より長城越えて黄沙降る

全

(忠・孤・と・ゆ)

鎮座する昔庄屋の内裏雛
筑波嶺も浅間も見えてはだら雪
地の果てのロカの岬や春の海

けい 亜 昇
い 子 也 昇
子 也 昇

(くす・ゆ・國・正)
(健・た・ゆ・け)
(そ・清・正・〇昇)

・ポルトガルにて
頬に消ゆ束の間に降る春の雪

天牛

(忠・た・己・○盛)

三点

◎夜降りて朝日に消える名残り雪
這へば立て立てば歩めや草青む
囀りや象の背を搔く竹簾
レマン湖に映えるアルプス花木
ほのかにも笑み立ちのぼる母の春
東の空の白みて百千鳥
春昼や袴姿が連れ立ちて

忠彦 孤舟 康敏 ゆたか 啓子 全 亜也

（孤・た・國）
（そ・〇・堂・昇）
（く・と・啓）
（そ・く・盛）
（と・清・壱）
（五・清・百）
（龍・康・天）

二点

◎春愁ふ米が高いの誰のせい
配信映画ひざに置く雛あられ
蒨の薑揚げたて嬉し夕餉かな
雲雀東風抑え切れぬは旅心
風光る川原の子等の爆ずる声
◎啓蟄や人垣できる駅ピアノ
啓蟄や百軒店で昼の酒
馬酔木咲く奈良を案内の仏かな
卒業の子より両親かたくなり

忠彦 千恵 ただしげ 健介 堂哉 昇 亜也 盛雄 天牛

(孤・正) (忠・臣) (ゆ・天) (○孝・堂) (く・百) (孤・天) (康・隆) (千・け) (忠・孝)

一点

アバターに本音吐露する四月馬鹿
若者に贈るわが読書録春うらら
薄化粧昼にはすっぱん春の雪
朱鷺と云ふその名の如く羽裏美し
濁声や朝から騒ぐ猫の恋
白に黄蕾開いた水仙花
満天星の白い鈴咲く雨上がり
春雨やスペイン坂の女神像
老いてまた亡父母と来し蕨取
春の海海女採る貝を賞味せり
裏町のネオンきらめく春の暮
霞透く屋島の沖の海の紺
白梅の蕾つぶらに枝覆う
生成り自画像大分春がすみ
春場所や横綱はまた蒙古継ぐ

昇 正明 國護 全 全 ゆたか 正己 康敏 全 全 ただしげ 全 千恵 五郎太 孤舟

(忠) (龍) (己) (清) (允) (天) (た) (允) (己) (國) (と) (昇) (龍) (隆) (正)

建て替への進む片隅母子草	啓子	(〇己)
春うらら「旅」と題したカメラの絵	全	(國)
草の香を残す米炊く彼岸入り	全	(ゆ)
白い村猫のあくびに春の風	けい子	(啓)
・・・スペインの白い村で有名なミハスで		
春疾風土俵に競ふ心、技、体	盛雄	(昇)

【句 評・短 評】

八点句

薄紙に優しく包み雛納め

忠彦

孤舟選者・・・代々伝わる貴重な雛人形。優しく包んで来年まで休んでもらおう。
 ただしげさん・女の子のいる家庭のほのぼのとした様子が感じられる。
 百合子さん・薄紙を優しく解いてひな壇に、節句が終りひな壇からおろして薄紙に包んで納めて、また来年！

亜弥さん・・・お顔は細長く畳んだ軟らか中味を八巻のように紙の後ろで縛っていました。
 天牛さん・・・古くから家に伝わるお雛さんでしょう。綿を使ったりして大事に取り扱います。
 薄紙が効いていますね。

七点句

どの墓も一刷毛の雪彼岸寺

くにお

孤舟選者・・・あたかも故人が白い帽子を被って現れたようだ。
 五郎太さん・・・今年は都心は雪がほとんど積もらずにすみしました。
 千恵さん・薄く墓に積もった雪に対して「一刷毛の」なんていう言葉を思いつくなんて！！

薄氷や八十路の坂は急がずに

五郎太

孤舟選者・薄氷を踏む思いで、慎重にゆつくりと歩きたいもの。
 千恵さん・・・坂道が凍ってたら要注意です！！八十路でなくとも。
 隆さん・・・「薄氷やゆつくり歩く八十路」でも。
 盛雄さん・・・作者の仰る通りです。何事も慌てない、ゆつくりずむで行きましょう。

鳥帰る星座は空の羅針盤

健介

孤舟選者・・・夜は星を羅針盤として渡ってゆく鳥たち。
 とみ子さん・・・理性的な言葉で 「鳥帰る」の余韻を表現されたと思いました。
 正明さん・・・句姿が広くて良いですね。
 百合子さん・・・最近、鳥の不思議な能力を『僕には鳥の言葉がわかる』（鈴木俊貴著）『地球ドラマチック』（NHK番組）等々で知り、ただただ驚くばかりです。

六点句

制服をすこし着崩し卒業す

孤舟

千恵さん・・・在学中は校則通りに着てたけど卒業式くらいはちよつと自分流にしたのですね。
 亜也さん・・・「すこし」が根が生真面目なのを滲ませるのによく効いている。作者の少女時代はどうだったのかも気になりました。

鳥帰る噴煙猛き桜島

堂哉

隆さん・・・鳥は帰って吾は帰れぬ鳥となり。

日向ぼこあの世この世の渡し舟

百合子

龍平さん・・・川端康成〈山の音〉で来世近しと予感したお爺の感覚に通じませんか？

堂哉さん・・・気持ち良いまま気づかぬ間にあの世にたどり着けたら！

亜也さん・・・寅さんの映画のように春の土手で舟の往復を眺めているイメージも浮かびました。

三恵さん・・・春の柔らかな陽を受けて、うつらうつらしているとなんと面白い心地よさに思わず、このままあちらの世界に引きずられて…なんて。怖さがピリツと効いてます。一見のどかですが、実はシュールな怪談噺。面白いです。

五点句

色褪せた雛飾るたび母偲ぶ

忠彦

ゆたかさん・・・母を偲ぶ心情がいいです。

青き踏む名を持つ山と持たぬ山

孤舟

健介さん・・・大谷のごとき巨峰は別格、多くは無名の小山たちですね。

亜也さん・・・春の野を歩きつつ連なる山々を眺める情景で、山の名がふと気になるところに共感。

盛雄さん・・・日本の百低山を目指す友人が居ます。

京菓子の萌黄色より春兆す

千恵

五郎太さん・・・ウグイス餅でしょうか。

康敏さん・・・茶道の上菓子、繊細な色合いに季節感が溢れます。

啓子さん・・・和菓子は季節を先取りして美しく、感性を刺激します。日本の心が宿ります。

天牛さん・・・萌黄色だけでなく京菓子の淡い色が春の心地を誘いますね。繊細な方の句でしょう。

春の雪近況すこし偽りて

とみ子

健介さん・・・そうですね、近況を多少粉飾すること判りますね。とくに春はそういう心境になりましうね。

堂哉さん・・・何を隠したのかな？思わせ振りですね！

啓子さん・・・思わぬ春の雪にご機嫌伺いのお電話でも入ったでしょうか。実は少し体調を崩しているけれど、久し振りのお電話で元気だと伝えている様子が、お気遣いと共に感じられます。何気ない日常のこころもちを上手く捉え表現されています。

水温むいでや小鮒の顔を見に

亜也

五郎太さん・・・春の沼でしようか、小鮒の顔が実にいいですね。

ただしげさん・・・釣り好きの人の春の到来を面白く詠んでいる

隆さん・・・いでやの相手は籠り人かな。人に会わなくても自然には触れたい。

啓子さん・・・春の雰囲気は無邪気に詠われて微笑ましく、水温む、小鮒の顔、取り合わせが素晴らしい。

四点句

木々芽ぐむ小さな命たくましき

忠彦

とみ子さん・・・いろいろな木から萌えでる芽の美しき、健気さには感動します。

康敏さん・・・萌え出る木々の芽と逞しく成長して行く嬰兒の取り合わせの句。良く響き合っている。

甲羅干す亀まどろみの日の永さ

孤舟

千恵さん・・・亀のまどろみで一層日の永さが際立ちます。

康敏さん・・・「甲羅干す亀のまどろみ日の永き」と切れを入れ、下五は「日の永き」としたら如何でしょう。

春の富士手庇に入れ行人坂

とみ子

五郎太さん・・・目黒の急坂、眩しいような朝なのでしょね。中七が見事です。

康敏さん・・・行人坂は江戸時代より富士見の名所。現在でも都心唯一の富士山が見える場所です。

啓蟄の大地踏みしめ嬰立てり

康敏

孤舟選者・・・啓蟄の虫のように、生まれて初めて戸外でよちよち歩きを始めた嬰。

盛雄さん・・・お孫さんの成長ぶりでしょうか。中七の『大地踏みしめ』が良かった佳句。

浅春の早も乙女の素脚かな

堂哉

龍平さん・・・(寒くないの?)聴いて見たいけど睨み返されそうでネエエ

隆さん・・・「春浅し素脚で町を乙女らは」でも。和語が馴染む。

※句会上で…浅春(季語は春)素脚(夏…本来の季語は「跣・素足」なので作者は「素脚」として季重なりを避けたということだろうか・・・

逆立ちし蜜を吸い取る目白かな

正明

五郎太さん・・・いい場面に遭遇されました。

千恵さん・・・よく見かける風景ですが、逆さ大丈夫かな?つていつも思います。可愛いです。

堂哉さん・・・正に今朝、我が家の庭でこの景色を見て家内と感心していたところです!

百合子さん・・・目白をよく観察しておられるこそ生まれた一句!

糟糠の妻かも知れぬ残り鴨

昇

孤舟選者・・・渡りに耐えない病気の雌鴨を断腸の思いで残して、雄鴨は北へ帰っていった。

百合子さん・・・哀惜と愛惜を思いました。

古代より長城越えて黄沙降る

昇

孤舟選者・・・黄砂は古代より永遠に続く自然現象。

とみ子さん・・・季節風が強い時には今も変わらない現象です。考えて見ると確かにそうですね。

ゆたかさん・・・長城を超えろという発想が素晴らしいです。

鎮座する昔庄屋の内裏雛

昇

ゆたかさん・・・さぞかし立派な雛でしょう

筑波嶺も浅間も見えてはだら雪

亜也

ただしげさん・・・雄大な風景が目には浮かぶよう。

ゆたかさん・・・広大な景色が目には浮かびます。

地の果てのロカの岬や春の海

けい子

・・・ポルトガルにて

昇さん・・・ユーラシア大陸の最西端のロカ岬の断崖から眺める春の雄大な大西洋。ポルトガルに一時住んだ無頼派作家の檀一雄もこの大景を眺めたのでしょうか?

「落日を拾ひに行かむ海の果」の彼の句を思い浮かべます。

頬に消ゆ束の間に降る春の雪

天牛

盛雄さん・・・浅春の雪を『頬に消ゆ』と詠まれた繊細な感覚が素晴らしい。

三点

夜降りて朝日に消える名残り雪

忠彦

孤舟選者・・・春になって降る雪は淡く儂いもの。

ただしげさん・・・夜来の雪が朝日に溶け、何となく名残惜しさが感じられる。

這へば立て立てば歩めや草青む

孤舟

堂哉さん・・・気分が良く分かります。笑顔が目には浮かびます。季語が良いですね!

轉りや象の背を搔く竹箒

康敏

とみ子さん・・・象が気持ちよさそうに目を細めているでしょう。

啓子さん・・・象の背は竹箒で搔くのですね。上五の季語と、気持ちよさそうな象さんの景が、穏やかな春のいちにちを描いてまったりとした気分を誘います。

レマン湖に映えるアルプス花水木

ゆたか

盛雄さん・・・何となく甘さが滲む旅先の一句。女性の作品？

ほのかにも笑み立ちのぼる母の春

啓子

とみ子さん・・・お母様の笑みに、安堵とともに温かな春の訪れを感じました。

亜也さん・・・認知症気味のお母様への愛おしさのようなものが伝わってきて感銘深い。

東の空の白みて百千鳥

啓子

五郎太さん・・・「春は曙」、山が明け行き、鳥が鳴き出しました。

百合子さん・・・自然、季節と鳥の生態をよく観察しておられるこそ生まれた一句！

春昼や袴姿が連れ立ちて

亜也

康敏さん・・・卒業証書の筒を片手に街に繰り出す、女子学生の晴れ姿。

天牛さん・・・最近はずの外袴を着ける人が増えたように思いますが、たまには着物を着たくなるのですね。

二点句

春愁ふ米が高いの誰のせい

忠彦

孤舟選者・・・「春愁」は心理的な季語だが、俗っぽい「米価高」を取り合わせた諧謔味。

配信映画ひざに置く雛あられ

千恵

亜弥さん・・・映画館でのポップコーンよろしく家でも膝の上ぬ置くところに可笑しみあり。

落の臺揚げたて嬉し夕餉かな

ただしげ

ゆたかさん・・・落の臺の揚げたておいしそうです。

天牛さん・・・ついこの間、故郷の妹から落の臺の佃煮が届き、熱いご飯と賞味したばかりだもんですから、つい。

雲雀東風抑え切れぬは旅心

健介

孝岳さん・・・ひばりが鳴く季節になり、心が躍るように旅に出たくなる。その気持ちがよくわかります。

風光る川原の子等の爆ずる声

堂哉

百合子さん・・・子等が生き生きと動き回って笑いころげる声まで聞こえそうな情景が浮かびました。

啓蟄や人垣できる駅ピアノ

昇

孤舟選者・・・何処からともなく現れ、早速ピアノに向い名曲を弾き始めた。

天牛さん・・・気候が良くなると出てくるのは虫だけではないですね。

啓蟄や百軒店で昼の酒

亜也

康敏さん・・・春眠をむさぼり、ゆっくり起きて、のこのこ渋谷へ。百件見世の居酒屋で昼間からちびりちびり。季語が効いている。

馬酔木咲く奈良を案内の仏かな

盛雄

千恵さん・・・奈良に数多おわす仏様に導かれるように訪ね歩く。まるで案内されるかのよう。

一点句

若者に贈るわが読書録春うらら

五郎太

隆さん・・・次々と世代を継ぎし読書録。

朱鷺と云ふその名の如く羽裏美し

千恵

※句会上で・・朱鷺は秋の季語。

濁声や朝から騒ぐ猫の恋

ただしげ

とみ子さん・・「濁声や」であの騒がしい猫の鳴声を実感しました。

老いてまた亡父母と来し蕨取

正己

ただしげさん・両親と来た蕨取の懐かしさが感じられる。

春の海海女探る貝を賞味せり

ゆたか

天牛さん・・・昔、取引先の社長に連れられて済州島へ行き、韓国人の海女さんが採りたての

「さざえ」や「あわび」を山ほど盛って食べさせてもらったことを思い出しました。

何とも云えぬ美味しさでした。

裏町のネオンきらめく春の暮

ゆたか

允章さん・・・若い頃はネオン街をよくうろついていたものです。

生成㊦自画像大分春がすみ

正明

龍平さん・・・自画像始め世界中がジブリ風の世の中に成って来ましたね！日本発ですって？

建て替への進む片隅母子草

啓子

正己さん・・・古い建屋は建て直されるも、自宅の庭でお母さんと遊んだ懐かしい思い出はいつま

でも心の中にあり続けるんでしょね。

草の香を残す米炊く彼岸入り

啓子

ゆたかさん・・草の香りがただよってきます。

白い村猫のあくびに春の風

けい子

・・スペインの白い村で有名なミハスで

啓子さん・・スペインの、有名だけれど田舎の村。猫のあくび。カメラマンの岩合さんの番組が浮かびます。いかにものんびり、平和な景。いいショットです。下五がぴった

り。

(句の部・了)



【次回青葉会予定】

次回・・令和七年四月二十四日(木) 十三時～ 三茶しやれなあと 6階ビーナスの間

ご出席の方には、当季雑詠五句、ご投句の方には二句を目処にお出しください。

締切日は、四月十九日(土)中とさせていただきます。

次々回予告・・五月二十二日(木) 五月は例年通り「吟行」の予定です。

ご参加の方は、先に㊦句の当季雑詠をご出句いただき、当日㊦句の作句をご披露いただきます。

ご投句の方は、例月通り、2句を目処にご出句ください、

ご出句の締め切りは、五月十七日(土)中と致します。

○来月のご案内で改めて詳細ご連絡致しますが、以下の予定といたく存じます。

吟行の場所…千代田区九段 皇居北の丸公園
待ち合わせ：10：30 地下鉄東西線、半蔵門線 九段下駅 4番出口下（構内…4番出口を上ると

「昭和館」

田安門から北の丸公園に入り、南に下る形で散策・作句、国立近代美術館を目指し、竹橋に出るルートを考えております。

※この地域についてはご存知の方も多いと思いますので、ご参加の方に就いては、待ち合わせに間に合わないなど、ご都合に合わせ、北の丸公園を吟行場所として作句されれば、ご自由にランチを摂って十三時に丸紅4階会議室に集合されることでも構いません。

吟行中に作句2～3句、事前に2～3句、全5句をご出句いただきます。

【青葉会報】

一、 青葉会句会当日は、ご出席九名。今季は時々ご出席をと努力して下さっている昇さん 亜也さんにご出席と、今回体調を崩されご欠席だった五郎太さん、とみ子さんの不在を埋めてくださいました。五郎太さんはいつも披講進行をしてくださっているため慌てましたが、以前ご経験のある亜也さんにご出席だったのは幸いで、披講進行をお引き受けいただきたいへん助かりました。

二、 句会の中でもそうでしたが、ご出席なくともしつかり選句いただく皆さまから、春の明るい軽快な佳句が多く、選句を楽しんだという嬉しいコメントを頂きました。その皆さまのお言葉そのままに、選句の点数もいつもよりばらけております。今回の最高点は八点で作者は忠彦さん、次いで七点に、くにおさん、五郎太さん、健介さん、六点に、孤舟さん、堂哉さん、百合子さんと続きました。そうした中で四点句は十二句と最近では多く思えましたし、一点句まで眺めても皆さまが選句を楽しめたことが感じられます。

三、 前回の句会報にて、本年度の会費のお願いをいたしましたところ、早々に会費を頂き有難うございました。

四、 「青葉会会員名簿」作成を考えております。
会員の皆さま（通常、ご出句、ご選句いただいている方々）の名簿を作成したいと考えております。

個人情報保守秘義務が徹底されつつある現代社会での運用に鑑み、青葉会としても皆さまにご心配をおかけしないよう、必要最低限度の項目のみを必要な方にお配りする、という形を取りたいと存じます。これは偶々私ども事務的作業をしております者たちが、当該情報が無いために慌てたり困ったりしたことがあったため、この際皆さまにご了承いただき、当方にて必要と思われること、について個人情報をご頂戴したいというお願いでございます。

具体的には、お名前、ご住所、お電話、メルアドと云ったところですが、外に出す必要がある時に 掲載可、不可といった選択をしていただけるよう項目作成をしてご記入いただこうと考えております。

尚、本作業は、一昨年から青葉会に入会された 田島正己さんにご担当戴く予定です。追ってこの田島正己さんから、メール或いは郵送にてご記入要領を付して表をお送りしたく存じます。当該作業のために、現在当方にて持っている、みなさまのメルアド、ご住所を田島正己さんに開示し使用いたしますこと、ご了解いただきたくお願い申し上げますとともに、ご協力賜りたく何卒よろしくお願い申し上げます。

五、【関係者近詠】

孤舟選者近詠

犬ふぐり夜は星空へ紛れ入る
髪型は何れも螺旋つくしんぼ
流水の軋み人魚の慟哭か
地球儀を廻し弥生を引き寄する
淡月のとなり地球の浮いてをり
蜃気楼竜宮城の崩落す
漁火は星に重なり蛍烏賊
春愁や文楽人形肩で泣き

——角川「俳句」4月号「作品8句」より——

沿線ここも同じ駅ビルと黄落樹
野良猫の堂守風貌日向ぼこ
二十日余の絶食重き雑炊碗
病む父に長男たらんと枇杷の花
熊笹を窄め会津の霰打つ
古井戸の櫛形堅牢城の冬
号砲と古城を仰ぐ冬の雷
片脚の薄氷へ立つ残り稲架
蔵店の障子戸重き十二月
綾取りのはらり解けて冬銀河
厨房の火伏せ飴色十二月

眞希子	十年前妻は落葉を掃いてゐた	青史
全	阿と言へば咩と炬燵を立ちし妻	全
全	白鳥よ今ごろ韃靼海峡か	全
全	をちこちに吾妹の笑顔十二月	全
弘子	冬ぬくし心離れぬひとがある	全
全	あの日の朝	
全	冷たかりき妻の手もまたドアノブも	全
全	大晦日きつと深酒きつと歎(なく	全
全	熟々のラ・フランス旨しお裾分け	東紀
全	裏山の柿狙ひをる鳥数多	全
全	冬至南瓜甘党好みの昼餉かな	全

——「森の座」(日経俳壇選者 横澤放川主宰) 三月号より——

令和七年四月九日

(了)